

平成 26 年度 文学部プロジェクト研究 研究活動報告書

	職名	教授	氏名(代表者)	遊 佐 徹	配分額	800,000 円
プロジェクト名	近代アジア世界における自己表象／他者表象の形成・受容過程の研究					
目的と活動の概要	<p>[研究の目的]</p> <p>クールなハイテク国家の平和な住人、かと思えば、残虐非道な侵略者、軍国主義者。近年の私達のイメージはかくも振幅が大きいものがある。その要因には近隣諸国との政治的軋轢も確かにあるが、それも含め、私達は内的な自意識と外的に描出される他者表象との間で「自画像」を確認し続けなくてはならない困難さに苛まれているのである。実は、こうした困難は、日本においては 120 年前の日清戦争頃から増大したものであった。国際社会という新たな「鏡」の現出と近代的自己定立の意欲が自己表象確立のエネルギーと困難さをもたらしたのである。そして、こうした力学は、近代日本のみならず、他のアジア諸国にも同様にかつ複雑化（「鏡」の多重化）して働くことになった。本プロジェクトでは、表象文化研究の観点に立って、近代アジアにおける「自画像（自己表象）」創出のメカニズムとその「像」の興味深い実際を「鏡」としての西洋の存在を一方で意識しつつ（もちろん、近代西洋世界にも「自画像」創出のドラマは見出せる）、日本、中国、東南アジアの諸地域に探ることを目指す。</p> <p>[活動の概要]</p> <p>平成 26 年 12 月 10 日に研究会を開催し、研究メンバー各自の研究状況・内容を報告した。</p> <p>また、鐸木、渡辺、遊佐は研究成果の一部を社会文化科学研究科主催の公開講座「イメージのなかの東アジア」で市民向けに披露した（2014 年 11 月 8 日、22 日、29 日）。</p> <p>[成果と今後の展望]</p> <p>鐸木：日仏美術学会で研究発表を行い（「聖像（エイコーン）から聖体（コルプス・クリスティ）へ」2014 年 6 月 28 日、於：京都大学）、論文を 2 本執筆した（“Icons in Japan Painted by Rin Yamashita: Anonymity and Materiality”, in <i>Convivium</i>, 1/2, Brno, 2014, Dec., pp. 58-73. 「古代の神像の脱魔術化：エウセビオスの場合」『パトリスティカー教父研究』第 18 号、2015 年 3 月 30 日、21-41 頁）また東ヨーロッパを紹介する講演会「セルビア・未知のヨーロッパ」を企画し開催した（2015 年 2 月 26 日）。</p> <p>渡辺：近代ヨーロッパにおける東南アジア像、インド像に関わる図像資料として、当時の旅行記などに附された挿絵、写真などの収集につとめたほか、第 1 回「近代移行期の港市と内陸後背地の関係に見る自然・世界・社会観の変容」研究会において、その研究成果の一部を報告した（「エーヤーワディー河が結ぶベンガル湾・ビルマ・雲南～18-19 世紀を中心にして～」2014 年 6 月 14、15 日、於立教大学）。</p> <p>佐々木：幕末から文明開花期の欧米人に対する認識をあらわす図像資料として横浜絵（横浜の外国人の風俗を描いた浮世絵版画）や錦絵新聞（新聞記事に取材した浮世絵版画）の作例と先行研究の収集につとめた。</p> <p>遊佐：李鴻章の世界周遊（1896 年）において形成されることになった西洋人、西洋社会による中国人表象に関する資料の収集をおこない、その成果の一部を「フィンガーボウルと李鴻章（2）」（『岡山大学文学部紀要』62 号、63-72）として発表した。</p> <p>平成 27 年度には、一連の研究課題の発展型として、「近代イノベーションと表象観念の変容」というテーマでのプロジェクト研究の継続を考えている。近代以来技術革新によって進展、変化し続けることとなった表象文化、観念と知覚の変容の関係（それが相互影響関係であることは言を待たない）を知覚イノベーション自体を主に受け取る側であり、またその知覚の対象ともされた近代の日本、中国、東南アジア、ロシア・東欧の諸地域から捉え直すという新たな視点と構想をもって解明することを目指すものである。</p>					
	関係教員等 (代表者※印)	氏 名	所 属 ・ 職 名	役 割 分 担		
	鐸木道剛 渡辺佳成 佐々木守俊 遊佐 徹 (※)	文学部 (哲学芸術学)・教授 文学部 (歴史文化学)・准教授 文学部 (哲学芸術学)・准教授 文学部 (言語文化学)・教授	西洋を基軸地域とする研究責任者 東南アジアを基軸地域とする研究責任者 日本を基軸地域とする研究責任者・予算 管理者 中国を基軸地域とする研究責任者・研究 総責任者			